

## 博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	鈴木 孝治
論文題目	注意機能障害の認知神経心理学的研究 ～作業療法学分野での活用をめざして～
論文審査担当者	主 査 御領 謙 ㊟
	審査委員 村田翼夫 ㊟
	審査委員 広瀬雄彦 ㊟
	審査委員 八田武志 ㊟

本論文の目的は、注意機能を中心とする認知機能を、認知心理学的枠組みに基づいて精度高く効率的に計測することが、脳損傷患者を対象とする作業療法の現場で極めて有益かつ必要であることを、理論と実証的研究とを通して示すことにある。論文は実質的には二部構成となっており、一部では主として作業療法の領域における認知心理学的アプローチの必要性が理論的に論じられている。二部では、一部で述べた立場に立って独自に開発した認知機能検査バッテリーを、脳損傷患者群と健常者群に実施した結果が詳細に分析されている。

一部（論文では一部「序論」と二部）では、作業療法の定義が示され、その現状が述べられている。作業療法においては、療法としての実践的貢献度は高いにもかかわらず、学問としての理論的枠組みが未だに不明確であると指摘し、作業療法の分野における教育の向上や、作業療法の発展に寄与する基礎的、実証的研究の促進のためには、理論的枠組みの一層の整備が必要であると主張している。作業療法の現場では、失語、失行、失認、半側空間無視、注意障害、社会的行動障害、記憶障害、遂行機能障害などのいわゆる高次脳機能障害に対処しているという。これらの実践を支える理論的枠組みには精神神経学、生理学、物理学、神経心理学、認知心理学などの諸学問が含まなければならないが、その中で認知心理学の役割は極めて重要であるにもかかわらず未だにその導入が不十分であると指摘している。その上で、著者は独自の理論的枠組みとして「高次脳機能障害モデル」を提示するに至っている。これは従来の「人－作業－環境」を中核とする「作業療法モデル」を、神経心理学的知見に配慮しつつ、認知心理学的機能モデルと整合性のある形に拡張したものである。

二部（論文では3部）は上記の理論的枠組みに沿って行われた実験的研究の報告である。注意機能に関連する能力を中心に、認知機能を計測する5種類の認知機能検査が新たに開発された。これらは従来の筆記式検査と異なり、ノートパソコンによって課題の提示と反応の取得を行うものである。同一被験者に繰り返し実施することが可能であるように設計されており、また被験者がゲーム感覚で参加できるように留意して開発された。これらの検査を、医師により軽度な意識障害を持つ

と診断された脳損傷患者約80名と、100名を超える健常な対照群に対して実施し、信頼性、妥当性の検討を行うとともに、患者群と対照群との判別力、患者群における障害の程度の評価に資する指標の決定等が試みられた。正確さの指標と反応速度の指標をデータとして、判別分析や因子分析等の多変量解析が行われた結果、これらの検査により患者群と対照群とを精度高く判別しうることがわかった。またこれらの検査が4種類の独立した認知機能を測定していることが判明した。同時に計測された既成の検査の結果等との比較検討の結果、それら4種の認知機能は主として注意機能に関連するものと推測できた。そして、患者群をこれら4次元空間上に位置づけることにより、各被験者の認知機能障害の特性と程度とが読み取れ、リハビリテーションにおける介入の手がかりを得る可能性が示された。

審査委員会では、提出された論文の査読と公開審査会における口頭試問を通して慎重に審査した結果、以下の諸点に関して疑問や意見が提示された。

- 1) 本論文の二部において、脳損傷患者の損傷部位を示す脳画像等との関連について検討されていない。このことは神経心理学的視点から見れば大きな欠点と言える。
- 2) 本研究で得られた認知機能の各指標に関して現段階においては標準化が行われていない。実用的には標準化を行い、リハビリ的介入の決定に利用しうる基準値の設定が必要であろう。
- 3) 本研究で用いられた認知機能検査バッテリーを真に実用的なものとするためには、最新のIT技術を利用して、さらに利便性を高めて行く必要がある。
- 4) 一部と二部の関連が明確でない。つまり一部で提案された著者のいう「高次脳機能障害モデル」はあまりにも概念的、概略的であり、二部で実施された実証的研究との対応が明確でない。
- 5) 誤字脱字、意味のあいまいな記述が散見される。十分な推敲、校正が必要である。

以上のような欠点と修正すべき点はあるにしても、一部、二部を通して本論文は、1) 作業療法が作業療法学という一つの学であるために備えるべき性質を明らかにし、特に認知心理学的視点の導入の必要性を根拠に基づき強く主張している点、2) その視点を持って実践された実証的研究が、作業療法の臨床場面に有用な情報をもたらすものであることを明確に示した点に特徴があり、高く評価しうる。また、認知心理学的視点と技法が高い応用的価値を持つことを示し得た点において、本研究は心理学的研究としての価値が高い。そして指摘された欠点や改善点に関しては、著者は今後それらに対処する意志を有し、また十分に対処しうる環境にあることが確認できた。

以上により、本審査委員会はその総意をもって、本論文が京都女子大学の博士（教育学）の学位に値するものであると判定する。